芭蕉を中心とせる俳諧と禪との關係

福富椿山

序論

俳諧は古い言葉である。現に用ひられて居るところの十七字の詩形を指すばかりではなく、古くは莊子の逍遙遊の初頭に齊諧と言ふ言葉で現れて居る。此の言葉に就いて牧野藻洲氏は齊國に傳はれる俳諧(滑稽)の事を記したものであると解說して居られるが、要するに怪異の記事を載せた書である。吾國に於ては俳諧の前身である和歌の狂風にこの名稱を付して居る。既に如上の意味に於て此の言葉は俳はたはむれ諧はおどけを意味せる何れも滑稽諧謔な言葉である。斯かる內容を有せし言葉が嚴格なる格調より脫化せし連歌の狂體に迎へられて遂に俳諧の起源をなすに至りしは無理からぬ傾向と云ふべきもので、蕉風(芭蕉の俳諧)の鋭き改革に接する迄の貞享元祿以前の俳諧は正しく文字通りの俳諧であり、滑稽洒落をこれ事とせる名に相應しい遊びであつた。然るに貞享より元祿に、談林(西山宗因の俳諧)より蕉風へと進むにつれて、此の言葉は全く內容其のものを裏切る意味を有するものとなつたのである。殊に元祿時代の日本文學史上に奇くも現はれたる芭蕉の幽邃なる哲學觀と宗教觀とは彼の踏襲せる俳諧の上に、殆ど意義を異にせる傾向を賚したのであつて、俳諧はこれより文字其のものゝ意義を離れて發達する事となつたのである。勿論芭蕉の思想に大なる力を與へたる莊子の思想が芭蕉をして斯かる言葉を用ひせしめたのであるのかも知れないけれ共、彼の言葉に從ふに『俳諧は中以下のものとあやま

れるは俗談平話このみ覺えたる故なり。俗談平話を正さんが爲なり。拙き事ばかり云ふを俳諧と覺えたるは淺間敗き事なり。俳諧は萬葉集の心なり。されば貴となく賤となく味ふべき道なり。俳諧は風雅の短刀なり。我俳諧は一字不說なり』と論じて居るのを見れば、彼の意味せる俳諧は從來のそれと異りたるものであつて、更に彼の門人丈草の言葉に依れば『我翁(芭蕉の通稱)に問ふ處は禪の俳諧なり言葉の俳諧にあらず』と語つて居る。私の以下に述べんとする俳諧も亦此等の意味を有せる俳諧であつて、私は寧ろ十七字詩(?)と稱するを妥當と考へるけれ共、暫く先人の跡によつて俳諧と稱したのである。而して此の一文は禪の如何に俳人の詩囊を培ひたるかを知らんが爲にものせるものなれば俳諧偏重の誹をまぬがれざれ共、又一面には德川初期に現れたる思想の共鳴者として禪者の注意に價するものなることを信ずるのである。

本論

芭蕉に依つて革新の途につける俳諧唯一の共鳴者であり伴侶であつたのは禪である。純文學を論ずる俳諧の領域に、斯くの如き宗教を云爲するのは文學そのものゝ本質に悖るものであるかも知れない。けれ共、宗教と藝術が同じ理想の道ゆきを異にせるものにすぎないとするならば、牽强附會の矢を放つまでもなく私の論旨は是認せらるべきである。然らば何故に禪者が軌を一にして俳客と談じ、亦俳人の多くが禪門を敲いて道を味はんとしたのであるのか、これは彼の日本俳諧史の著者が『儒教を以て佛教を壓倒せんとせるが爲めに磊落奇偉の士は窮窟極まる朱子學に甘じ得ずして、遂に其の範疇を脱せんとせり。談林勃興も亦其の一面なるか』と論じて居るが如く、德川の掣肘政策は豪宕なる老莊思想の共鳴者をして文學に赴かしめ、文學の中に於ても極めて自由なる俗談平和に近き、而も豪宕なる氣分の表現に便なりし俳諧が特に選ばれたる文學にして、俳諧なる言葉も亦朱子學に對する反動として其意に反するに拘らず用ひられたのではあるまいか。

而も共鳴者の主なるものは禪者である。禪は佛敎中の老莊哲學とも云ひ得らるゝほど老莊趣味を多分に有して居る。斯の如き兩者が接近し共鳴したるは同時代の潮流に掉さす者としては自然の結果にすぎないのである。從つて俳界に遊び俳客と空蘿を談せし禪者が如何に俳諧そのものを眺めしかは次に起るべき問題である。私は此の問題を解くに當つて、先づ第一に何人が俳客と交遊し、吟詠境に浸りしかを述べんとするのである。元祿當時の禪界に覇者の大旆を振ひしは東に澤菴あり、西に盤珪あり、澤菴は盤珪に長ずること四十九才、正保二年(一六四五)に寂を示して居る。盤珪其時二十四才、俳諧も亦將に起らんとして、雲霓を望み見て居た時である。澤菴は文筆に長じ里俗に同じ敎化字内にあまねき禪將であつたが禪餘俳諧に遊び

とゞむれど花にさらばや歸る雁

何もなしわが頭陀袋夏祓

の二句が人口に膾炙されて居る。次に盤珪に就ては彼の元祿五俳女の一人である捨女に依つて其の俳容との交渉は伺ひ得らるゝのである。捨女は老ひて禪師の門に入り播州網干の里に結菴して不徹菴と號せしことは日本俳諧史にも亦新選俳諧年表等にも明記せられて居るのであつて、師の俳句には

草よ木よ汝にしめすけさの露

の一句が傳へられて居る。惟ふに師は澤菴に次いで起りし禪傑であつて、不生の禪風は師一流の假名文字のまゝで簡にして其の要を會得せしめんとしたる師の面目を有力に物語つて居る。更に蕉門の人々と最も親交のありし大巓に就いて述ぶれば、師は鎌倉圓覺寺の一六三世にして、蕉門の駿足寶井其角は師に就いて漢學を學び芭蕉も亦深交を結びし樣子であ

る。彼の芭蕉が野ざらし(甲子吟行とも云ふ紀行文)の紀行に於て、伊豆蛭ヶ小島の僧某より大巓禪師の遷化を聞いて、

梅戀うて卯の花拜む涙かな

の一句を其角がもこへ贈つて居るのを見れば芭蕉と其角及び師との關係は明になる。師の俳名は幻吁と稱し新選俳諧年表などにも其角門の俳客として載せられて居る。蕉風の先驅として、世に出でたる虚栗集(其角撰)の發句には、

禮者敲門柴朶暗く花明か也

の一句が載せられて居る。勿論虚栗調の佶屈生硬な漢語混りの俳句であるけれ共、幻吁なるその人が、吾禪門の一人として、當時の代表的選集に現れて居ることは記憶すべきことである。芭蕉と師との關係に就ては散逸して傳つて居ない。次に擧ぐるは芭蕉の師たる佛頂禪師である。師に就ては芭蕉自ら奥の細道(奥羽紀行)に於て、下野雲巖寺の奥に佛頂和尚山居の跡を訪ね

啄木鳥も菴はやぶらず夏木立

の一句をものして居る。亦甲子吟行より歸りし貞享二年の四月より卯辰紀行に旅立つ間の二年間は折々鹿島に佛頂和尚の菴室を敲き

月早し梢は雨を持ちながら

寺に寢てまこと顔なる月見かな

等の數句を殘して居るのであるから師と芭蕉との關係は知り得らるゝけれ共、尚此處に芭蕉の禪僧なるか否かに就て師との間に複雜なる考證が殘されて居る。試みに芭蕉を僧なりと肯定せる三國相承宗分統譜の一部を摘錄すれば、東陽英朝

（聖澤派）——○——○——愚堂東寔——鈍翁慧勤（江戸養岳寺）——佛頂河南（同臨川寺）——芭蕉桃青。と系圖して居る。芭蕉を法師とせることは彼の誕生地である伊賀の上野の愛染院に現存せる墓碑にも桃青法師と書かれてあつて、又芭蕉自身の生活も法師たる資格に恥ないのであるけれ共、次郎兵衛物語（芭蕉近從者の日記）の傳へて居る任口上人の添書を得て伊賀出奔後直ちに根本寺に佛頂和尚を訊ね、禪師に相見して旨趣を物語り十一月血脈相承せりと云ふが如きは早計に信ずべからざる事である。彼の三國宗分統譜の考へも亦此の邊より出しものであるかも知れない。殊に近頃樋口氏は芭蕉の研究なる一書に於て、彼の上京を伊賀出奔後數ヶ年後とし、次郎兵衛物語等の眞僞を疑ふて居らるゝから此の邊の消息は俄に判定し難いのであるけれ共、要するに佛頂禪師が深川の臨川寺等に於て芭蕉と談じ、彼亦辨道の士であつたことは疑ひ得ない史實である。此の點に就ては尙後章に述ることゝして次に太原派下の詩僧鐵山に就いてのぶれば鐵山も亦俳諧に理解を有せし樣である。師の詩文に關する手腕は定評あるものなれ共俳諧に關しては私が今夏妙心寺內大龍院に於て初見した短冊の

植へをきて花を見よとよ國の神

の一句があるのみである。此の一句を以て師を俳諧國に引き込むは不可なるも、有名なる詩僧として、文學的理解の深かりしことが亦師の俳諧を理解せられし證左ともなり得るのである。次に東嶺禪師に就いて述ぶれば師の宗門に於ける地位は萬人既知のことであるが俳諧に關しての逸話も殘つて居る。師一日、雪中菴蓼太に示すに

飛び込んだ力でうかぶ蛙かな（丈草の作？）

の一句を以てして居る。（近古禪林叢談）此の句が師の作であるか否かは疑はしいけれ共、爲人度生の活機略として、此

の一句を用ひたる處に白隱門下の麒麟兒たる東嶺の藝術眼を伺ひ得るのである。彼の關山門下の唯我獨尊を自稱せし愚堂にも

大ふくの茶のあつさにや梅干

の一句があると近古禪林叢談は傳へて居る。これに就いても其の眞僞は疑はしいものであるけれ共、愚堂壯時は鐵山等に參じ、鐵山既に俳諧に心ありしものとすれば亦此の一句に依つて愚堂の詩囊を探る掉さもなるのである。尙此の外に良寛、物外、祖曉等出で、良寛は歌人として既に知られ、亦俳諧に於ても有名なる

燒くほどは風が持て來る落葉かな

世の中は花の盛りとなりにけり

等の數句がある物外に至りては

桐一葉落ちて天下の秋を知る

との人口に膾炙されたる句を殘して居る。亦洒落僧なる仙崖には

青麥や關屋の跡の雉の聲

の名句があり、祖曉には

ぽつぽつと闇に穴あく螢かな

の一句がある。殊に明治に及では環溪出でて、芭蕉の古池の句に就いて古池眞傳を著し、

獅子吼ゆる音や谷間の雪解水

六十の春や行脚の旅支度

等の數句を吟じて居る。尙延享三年五月十日に寂を示せる覺芝の如きは猩々菴原松が布袋の圖に題して、

小袋に大千入れて花ごゝろ

なる一句を以て示すと、師は衲ならば

底ぬけの袋に實あり芥子の花

と云はむとのべて居る。此等は禪者の俳諧に遊びたるものなれ共、尙別に禪僧としての俳人丈草及び支考がある。丈草は內藤氏、尾張犬山の藩士にて諸書に指を切りて出家し先聖寺(光聖寺とあるは誤なり)の玉堂和尙に就いて禪を學ぶ云々と記してある。先聖寺に就いては現在の神護山先聖寺(犬山町外町)がそれであつて黃檗派に屬して居るから丈草の就いて學びし玉堂和尙も亦黃檗禪の宗匠である。而して丈草は禪僧なるよりも俳人として世に知られ、蕉門の寂味傳承の第一人者として器量拔群なりしことは師芭蕉の言葉によるも明かにして、『此僧この道に進み學ばゞ人の上に立たむこと月をこゆべからず』と推稱して居るのである。丈草の句には

大原や蝶も出て舞ふ朧月

時鳥鳴くや湖水のさゝ濁り

等、人のよく知れるものが多くある。支考に就いては幼時岐阜の大智寺(山縣郡)の弟子であつて、奇才に富み東都の某寺の大會に碧巖の講主へ八ヶ條の荊棘を難問せし爲めに法眷に嫉みを受けて勢州山田に隱るゝと俳諧奇人傳等に記されてある。長じて俳諧を學び蕉門に名を立てゝ、美濃派の祖と稱せられしが、才あまりて卑劣に流れ、僞文僞書を以て蕉翁を叙

し、己が名聞を高むるに努めたるが爲に同門の人々より擯斥せられ、殊に佯死によつて世評を聞かんとするなど丈草の高潔なるに比すれば雲壤の差を有するのである。

うき戀にたへでや猫の盗み喰ひ

などは支考の作として相應しいものではあるまいか。上來覺束なき資料によつて述べきたれるが。要するに禪と云へる其の中に於ても臨濟禪に屬する者最も多く曹洞これに次ぎ黄檗は極めて稀である。試みに以上を圖示すれば

禪
- 臨濟——澤菴・鐵山・佛頂・大巓・盤珪・愚堂・東嶺・支考・芭蕉(?)
- 曹洞——良寛・物外・祖曉・環溪・
- 黄檗——丈草・覺芝・

の結果を得る。尙此の外に蕉門の閨秀俳人なる園女の就きて學びし雲虎和尙があるけれ共和尙の何派に屬せし人なるかは俄に斷定することが出來ない。以上の諸師に於て特に注意すべきは芭蕉に對する宗教的解釋である。古來より古池の一句は禪の玄底であると稱せられ俳諧禪の研究さへ行はれて居る。勿論宗教と藝術は別個なものではなく、殊に芭蕉の藝術は宗教とも云ひ得るが故に、その作品に對する宗教的解釋も亦可なるものなれ共、偉大さを考ふる時に人々は比較的幽遠な宗教の世界に彼を擔ぎ込まんとするのであるが、思想の世界に於て彼を禪僧と許し得るとも形式的僧團に於て彼を僧侶と斷定し得るのであらうか、私は是の問題を後日に殘して次に俳人の禪に參ぜし人々に就いて述べて見やう。俳人の參禪に就いて先づ第一に指を屈すべきは芭蕉である。彼の佛頂和尙に參ぜしことは前既にのべたるが私は更に何故に彼が禪に參ぜしかを明かにしたい。前述の如く彼は俳諧の改革者であり、寧ろ眞の意味の創始者である。彼以前の俳諧は所謂俳諧

の爲の俳諧(滑稽の字義による)であり隨つて遊蕩文學に屬せるものである。此の形式を踏襲せる彼も亦初めは斯かる風流に交り、創作もし議論もしたのであつたけれ共、己に秀でたる天分を有せる彼の到底これに滿足し得ずして、天和より貞享に進むと共に彼の腕は益々冴へ、卑淺より高く深くへと、ある時は老莊の思想を憧憬し、亦萬葉集の心を味ひ、西行法師の行蹟を慕ひ、山家集に身を碎きて、遂ひに禪の流に浴するに至つたのである。斯くして禪に思想發達の窮極を見出したる彼に、偶々佛頂禪師の江戸にあるあり、遂ひに師の爐鞴に投ずることゝなつたのであらう。尙これに就いては當時の時代思想をも考ふべきもので、芭蕉が僧形なりし事も、亦天台止觀の月明らかに圓頓融通の法の灯かゝげそひ僧坊棟をならべ云々の奥の細道の一節や、三十棒を受けられたるしるし云々(史邦と去來との連句の付合に於て)などの言葉を味ふ時當時の思潮が如何に佛教的色彩を帶びて居たかが伺はるゝのである。殊に芭蕉は敬虔なる佛教の歸依者であり、禪者らしき生活をなしたる人なるが故に、佛教の理解に於ても亦當時の似而非禪客の上にあつたのであらう。更に彼の僧形に就いては、事務的才能に拙かつた彼の生活を思ひ出すのである。江戸に出で水道の吏となつて食を求めんとせし彼も風雅の心に其の業を奪はれて了つたのである。鹿島に遊びし頃、本間道悅に醫を學ばんと(隨齊諧話)したのであつたけれ共、これも亦成るなくして遂ひに俳諧の一事に向ひし事は彼自らの告白によれば明かである。『或時は仕官懸命の地を羨み、一度は佛籬祖室の扉に入らんとせしも、便りなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、遂に無藝無能にして、此一筋に繫がる』と幻住菴の記に彼自ら物語つて居るのを見れば上來縷述せる僧か否かは判定せらるゝのではあるまいか。殊に行脚の中に人生の寂しみを味つた彼には僧形こそ其寂味を增し又彼から生活の苦みを減ずる唯一のものであつたに違ひない。尙進んで彼の思想の一端を伺ふに彼の思想は前述の如く、禪と老莊とを基礎として生れたるもの

である。禪は多分の老莊趣味を有せるものであるから、老莊の哲學によつて育まれたる俳諧と共鳴するに至りしは前述の如くなれ共、尙別に彼の超越的人生觀を考へなければならない。『百骸九竅の中に物あり假に名づけて風羅坊と云ふ(卯辰紀行の一節)』と云へる言葉の奥には老莊哲學の影響を深く被れると共に、彼の人生を旅に求めし理由が暗に示されて居る又『僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の名をかうぶり(蝙蝠)の鳥なき島に渡りぬべくて、』と戯れて居る野ざらしの一節を讀めば蝙蝠の境に遊びし彼の心境を考へざるを得ない。乍然老莊哲學に依つて超世的傾向を多分に有せし彼が、何故に姥捨山の月に涙を注ぎ、富士川の捨子に猿愁を覺えたのであらうか、又藤堂公の面前にて煙草を慎み、茶代忘るべからずと諚したのであるか、此等を考ふれば超世的な彼の生活は亦反對に極めて現實に忠實なる生活其の物である。斯くの如く研究し來れば、其研究や直ちに册を成して到底小論の攝め得るところにあらず、私は幾多の問題を後日に殘して、彼の句に依つて其の一端を示さんとするのである。

夏來てもたゞひとつ葉の一葉かな

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな

草臥て宿かるころや藤の花

田一枚植て立去る柳かな

此の四句が彼の全體ではない。彼の全影は彼の句集であるけれ共割愛したのである。次に其角に就いて述ぶれば、其角は前述の如く圓覺寺の大巓禪師に就いて漢學を學びたるが又禪に就いても造詣深く、禪師の遷化に會ふや芭蕉と共に悲むで居る。

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶かな

などは私の好な句である。次に蕉門の女傑園女の事を述ぶれば、園女は伊勢の神官一有が妻である。氣禀すぐれし貞女であつて、夫の沒後は蕉門に遊び風雅を專らの樂みとしたのである。尙又雲虎和尙の禪門を敲き其の參禪の熱烈なりしは次の和尙とこの一揖に於ても明かである。

ある書の旨趣拜申候本求眞不求妄大道の根源誰もなる所憚ながら不斷一心深頭にのぼりての所作は柳綠花紅只其儘にして常に句をいひ歌につゞりて遊び申事にて候無益の口業に候はば一切經も無益の口業にて候法くさき事は嫌にて所作所行は念佛と句と歌となり極樂へ行くはよし地獄へ入ればめでたしそこに更に無分別に候云々

と述べて居る。此の一文が婦女子の手になりしを思ふ時、園女の面影は嚴冬の松柏を恥しむるものではあるまいか。此の外東嶺には蓼太あり、盤珪には捨女等あれ共、既に其の關係を述べつくしたれば略するのである。

結　論

上來述べ來れる兩者の關係は匆卒の間に緝め得たる資料に依りしものなるが故に不完全の誹をまぬがれないけれ共、更に概說すれば禪者の俳諧は敎訓的意義を含みて稍もすれば文學としての價値を失はんとして居るものも少くない。殊に宗敎的と言ふ言葉に於て既に夫れが月並に墮すべきものであると極言せる虛子氏等の月並研究者より見れば殆んど凡てが月並臭に屬するものであるのかも知れない。乍然宗敎が藝術的作品に其の內的力を及すべからざるものとは何人が規定して居るのか、宗敎と藝術とは全く一致を見ることの出來ない並行線的發展であるのであらうか、私は左樣に信ずる事の出來

ない一人である。高楠博士の宗教と藝術と哲學との分類は私の滿足する處である。『眞正の藝術は宗教と哲學との地盤がなくてはならぬ。此の兩者を地盤として表はれたるが本當の藝術である(生の實現としての宗教)』と喝破して居られる。殊に芭蕉は宗教を地盤として本當の藝術を創始せる偉人であるから私は彼の盡きない詩想と、理想を永遠に實現したる其の偉業を讃仰して止まないものである。(大正一三、一〇、二〇)